波多野精一先生

石原　謙

顧れば波多野精一先生との關係は、先生の友人同僚の方々を別としたら、私などは最も古い弟子の一人であろう。私が明治四十年七月に大學を卒業した時以來のことであるから四十年以上になる許りでなく、私の研究的生涯の全部が先生の誘導の下にあつた譯である。先生の支持なしには私の學問的な生活はなかつたと言つてもよい位である。それだけに今先生についての私の思い出は盡きない。しかしそれは私事に亘ることが多く、公けの事についても發表を憚るようなことが少くない。先生は隨分まめに手紙を記されたので、今私の手許にあるものも少くないが（恐らく百通を超えるかも知れない）、今はまだ公表すべき時期になつていないような氣がする。それでここには先生の經歷のあらましを私自身の見聞したままに記して責を塞ぎたいと思う。

私が始めて先生の聲咳に接したのは、私の大學卒業の頃であつた。當時東京大學にはケーベル先生の外に本當に哲學者らしい教授がなく、我々聊か淋しい感じがしていた。その頃先生は早稻田大學の教授で、ドイツ國留學を終えて歸朝されて間もない折で、槇村正久牧師の富士見町教會で日曜日朝ロマ書の講義を試みて居られた。私は之に出席して始めて先生を見、それから學友小山鞆音君と一緒に先生を牛込藥王寺町の御宅に訪問して學問上の話などをきいた。ついで九月から姉崎教授の歐洲出張中宗教學講師として東大に講義されてから私も聽講し、しかも原始基督教研究の關係から往週のように私宅に出入するようになり、しかも奥様が我々學生に特に親しくして下さつたために家庭的な交りを得たのである。

以上のような次第でその後の先生については比較的によく知つている積りであるが、その前の青年學生の時代のことは餘り詳かにしてはいない。雜談などの間に洩れきいた位の知識に過ぎないのである、それによると先生は明治十年松本藩士の家に生れたが、父君が早く東京に移られたので、既に小學校以來東京で教育を受けられた。この事は先生には得意であつたらしい。一體先生には信州人らしい御國自慢癖は全くなかつたが、田舍育ちは偏狹に傾き易いので學問をする者には都會的な環境の中で養われることが大切だというようなことを半ば冗談に誇りとしていられたことがあつた。中學時代には麴町區飯田町の住宅から高等師範附屬中學校に通學し、第一高等學校を經て、明治二十九年に帝國大學文科大學に入學し、哲學を專攻して三十二年に拔群の成績を以て卒業された。その頃哲學科には桑木嚴翼、姉崎正治、高山林次郎博士らに續いて蟹江義丸、紀平正美博士ら秀才が多かつたが、その中でも先生は語學に卓れ、丁度來朝されたケーベル博士の指導の下に哲學史を專攻し、原典と參考書とを廣く渉獵して古來の哲學者の精髓を深く理解し得た點で先生に及ぶ者はなかつたと言われている。卒業後直ちに明治專門學校（後の早稻田大學）に講師となり、哲學史を擔當

されたが、その講義は多少の字句の修正の上「西洋哲學史要」として出版せられた。先生の僅か二十四才の時の處女作で、恐らく大西祝博士の著に續くわが國第二の哲學史であるが、簡潔にして要を得しかも歴史的展開の跡をよく示し哲學史の本質と大綱とを捉えた點で比類なく、そのために長く教科書として用いられ、五十年を過ぎた今日でも未だに毎年新版を重ねているのは、わが國學界では全く珍しい事實に屬する。

早稲田での講義と同時に先生は大學院に籍を置いてケーベル先生について近世哲學史の研究に從事し、五年後には「スピノザ研究」と題するドイツ文の卒業論文を提出された。當時こんなに着實な哲學史の原典研究は稀で、殊にドイツ文論文は空前であつた。それはケーベル先生の審査により先生の留學後に學位が授與されたが、後に安倍能成君の譯筆によつて出版された。この卒業論文の提出後先生は早稲田大學の海外留學生としてドイツに赴かれた。私立大學からの留學であつたので旅費は充分でなく、英國などには勿論のことイタリア旅行などの餘裕もなく、ドイツ國内でもベルリンとハイデルベルクに二年間在學しただけで、例えばミュンヘンやドレスデンなどの見學も出來なかつたらしい。しかしハイデルベルクでは既にクーノー・フィッシャーに接する機會を失したが、ヴィンデルバンドの直接指導に與かり、また關係諸學科の講義に列せられた。就中キリスト教神學に深い關心を有し、しかもこの大學が宗教史學派の一中心地であつたので、その新しい研究態度に感化され、トレルチ、ダイスマン、ヴイス等の學風に動かされた。之は先生の後年の宗教哲學研究にも關係が深い。

明治三十九年に歸朝後は早稲田大學に據つて專ら研學に專念されたが、翌四十年九月東京大學の姉崎教授から招聘を受けて宗教學講師となり、一年間「原始キリスト教」の講義を試みられた。留學中に學び得た理解に基いて更に宗教史學派の方向に進められた解釋であり、當時の日本では未だ殆ど紹介されたこともない研究であり、しかも先生獨自の簡潔にして色彩のある強い表現を有し、聽講者に深い感銘を與え、その翌年「基督教の起源」と題して出版された時には異常の反響を呼び起した。四十一年には姉崎教授の歸朝によりもはや先生のキリスト教講義はきかれなくなつたが、引續き哲學講師として東大に殘り、哲學演習を擔當された。スピノザ、カント、プラトン、哲學史讀本などがテキストとして使用された。同時に植村正久氏經營の東京神學社にも講師として哲學史を講ぜられた。

然るに大正六年夏早稲田大學に大隈侯銅像建設問題に端を發して學問の權威を主張する教授團と學校當局者との間の紛爭を生じ、學生も之に呼應して混亂を來した事件が起つた。先生はその間全く沈默を守つて事態を靜觀していたが、九月の新學年に入つても事件は落着せず、しかも不快な態度なども見られるようになつたので、遂に早稲田を去ることを決意し辭任を表明されるに至つた。それは何れの側に與みするというのでもなくまた親しい同僚の幾人かが學園を去つたのに殉じて行動を共にするというのでもなく、全く獨自の立場で純粋に學者としての矜持を傷けまいとの意圖であつたと思う。ところがこのことを

傳え聞いた京都大學の深田康算博士ら舊友たちが、先生を京都に迎える好機會として直ちに先生と交渉を始めた。京都大學は文科創設の後に先生を迎えようとして交渉したことがあつたが、先生歸朝後時を經ていなかつた頃で早稲田との關係もあり、先生はその招聘を謝辭されたとの話であるが、今度は既に自由な身にもなつていたので、先生は大學の好意と舊友の友情とに感激して直ちに快諾の意を答え、たしか同年十一月には既に京都に轉住された。その時から先生の京都大學における新しい活動が始まつた。京都では先生のために西田幾多郎先生が進んで哲學講座專任となつて、宗教學講座を提供されたので、先生の宗教哲學者としての一生の努力がこの時から始められた譯である。之は先生に取つてはもちろんであるが、日本の學界に取つても最も意義ある事であつたと言つて差支ないであらう。

京都大學は由來日本の學界に最も優れた模範的な學風の樹立に努力し諸教授の熱心な協力によつて當時既に特色を發揮していたが、その學風は先生の來任によつて更に典型的な學者的人格を加えた觀があつた。私自身は先生の東京在住中は家庭的に可成り親しい交りを許されて先生の日常生活についても比較的に熟知していたつもりであつたが、京都に赴かれてから後の先生を詳かにすることは出來なくなつたとはいうものの、その後毎年少くも一二回は京都に遊んで、始めの頃は先生の家に逗留し、後には自分も年を取つたりして旅館に滯在しながら毎日のように先生を尋ねたりした。そして私の知つている限りでも先生は正に典型的な京都學者であつた。先生は大學に於ける專攻學科の深いまた充分な研究を畢生の任務となし、健康上の理由も伴つていたが、其以外のことには一切拘わらず、時には少しく潔癖に過ぎる嫌いさえなくはなかつたようであつた。大學の運營に關する事務的な仕事など、ある程度教授としての責任に關わつていると思われても、一事に關與すると更に他の事に累わされるのを恐れて默過するというようなこともあつたらしく、そのため教授會と學部長とに一切を託して、自身は研究に集中することが多くあつた。學生の指導も學問上のことには勞を厭わないが、就職や個人的の問題には觸れるのを避けた。同情はしながらもそれ等の事は各自が良心を以て處理すべきもので、自分のような無力な者は嘴を容れない という態度であつた。そのため學生が學問上の指導を感謝しながらも深くは近づけないという感じを抱いたのではないかと思う。

それだけに自身の生活を守ることにも嚴格であり徹底していた。自宅の書齋を研究室と定め、他には何をも顧みないという風で、室を飾ることもなく庭を樂しむでもなく、書物に親しみながら古書の探訪に興味を惹かれるでもなく、大學にも講義に集中して研究室の整備も助教授の人たちの相談に乘るに留まり、健康のために毎朝三十分位のきまつた散歩を取る外には外出することも稀で、講演や音樂會や社交的の會合に出席することは殆どなく、映畫などは全く見たことがなかつたろう。講演は大學内の哲學會主催以外に試みたことなく、雜誌なども哲學研究に研究の一部を載せたことがあつた許りであつた。旅行などは京都在住二十數年間に一二回公務を以て上京したことと止

なを得ない私用で上京した數回の外には全くなく、夏の避暑轉地やレクリエーションの旅行など考えもしなかつた。殆ど唯一の樂しみは毎週一回親しい若い人達と歡談し、自からの趣味で集めた内外の音樂レコードを聽く位であつたかと察する。これ程に徹底した學者的生活は、他に類例があつたろうか。

先生の研究生活も京都赴任後、大學に於ける擔任學科に全く集中されたように思われる。ドイツ留學前は哲學史研究殊にスピノザを主としたのは當然であるが、留學中は可成り自由な氣持で廣くドイツの學界に觸れ、音樂や劇オペラなどをも樂しまれたようにきいている。歸朝後も比較的にゆとりのある生活ではなかつたかと思う。その後も健康を損して外出が困難になつたが、讀書の範圍は可成り廣く、歴史、文學、音樂などを耽讀した。殊にギリシア史、ギリシア文學などは最も興味をもつて讀みあさつた。歴史では Historian's History やマイヤーの古代史など、ヴェルハウゼンの『イスラエル史』は宗教史研究上の必要もあつた。ホメロス、ヘシオドス、ヘロドトスやギリシア悲劇のような古典文學、之等はプラトン、アリストテレスその他哲學者の研究と關連していた。この時代には哲學史の研究は固より注意の焦點をなし、根本資料の研究に主力が注がれ、しかも古くはディールスの『ソクラテス前の哲學者』からカント、ヘーゲル等にまで及んでいたが、所謂大物に集中する以前からの方針は變らなかつた。同時に原始キリスト教の研究も興味の中心をなしていたのは勿論である。然るに京都赴任後は宗教學講座擔當という責任を強く感じられて、專攻學科の研究に集中し、しかも宗教學の普通講義を二三年もかかつて續講するというように、落着いて同じ問題を考え貫こうとする方法を取り、その他の問題もその立場から批判するような傾向となつたらしい。從つて大學の講義は普通講義に主力を注ぎ、外にはシュライエルマッヘルやカントの宗教哲學を講じたり、同時にプラトンやアリストテレスをギリシア語原典で讀んだりすることもあり、ギリシア宗教思想史を講義したこともあつたが、古典講讀以外では哲學史的理解が宗教學的興味に支配された。この最後の講義は終了後に印刷出版されたが、之に續いた原始キリスト教はついに書物にはならず、先生逝去後の昨年になつて漸く印行された。

以上は大體大正時代卽ち先生の京都大學二十年間の初三分一期間に屬する仕事であつた。その間に『宗教哲學の根本問題』という書が出來ているが、之は大正九年の大學夏期講習會に於ける講義を三木清君が忠實に筆記したもので、當時の先生の宗教學の理解を知ることの出來る重要な著作である。然るに之についだ次の三分一期間は先生に取つては思索時期で、先生は古來の哲學者神學者は固より、現在の哲學及び神學を廣く渉獵し、その凡てについて嚴密な批判對決を試み、そこから學び得るものを取つて考察の材料とし、苦心慘憺の結果獨自の宗教的立場を新しく築き上げられた。先生の學問はますます圓熟し、研究は宗教哲學體系の形成に集中された。從つてその一端を哲學研究などに發表された以外には全く論著がない。外的には沈默の時代であつたが、内的には苦しくはあつたとはいえ完成期

に先立つ大切な時期である。

最後の三分一期間はその研究の成果が完熟した時期である。それは昭和九年に岩波全書中の『宗教哲學』として纒められたが、先生に取つては殆ど十年間に亘る苦心の勞作であり、講義に於て繰返された所謂波多野宗教哲學の骨子をなす論述であつた。然るに先生の大學生活は昭和十二年夏を以て閉ぢられ、しかもその直前に胃潰瘍を患つて手術を受けなければならなかつたりして、學生えの告別の言葉もなしに教壇を去らねばならなかつたが、病の癒えると共に前著を補つて立場を明かにするための著作に入り、『宗教哲學序說』が昭和十四年に出版された。しかしその頃から周圍の狀勢が次第に惡化し、生活の困難や精神的の壓迫もあり、加うるに多年病弱な先生のために全力を捧げられた泰子夫人がその少しく前から病に臥して居られたがついに十四年一月に逝去されて、先生の家庭生活は頗る淋しくなつた。幸に令息雄二郎君は結婚して家庭を設けたが東京勤務であり、また令弟貞夫氏の一家は平塚に、末弟岩田達夫氏は築土の舊居に住まつて居られたので、十五年時局急を告げるに至つて住み慣れた京都田中の家を引拂つて東京に轉住することを決意された。雄二郎君は當時市川の假寓から東京の銀行に通勤していたが、十六年四月先生を迎えて、萩窪中通町に同棲することとした。先生は心配された潰瘍の再發もなく比較的に正しい生活を回復することが出來て再び研究に沒頭し、宗教哲學體系最後の完成に邁進された。書き殘された簡單な記錄によると、十六年秋十月頃に略ぼ着想を得、更に構想を練ること一年、筆を執つてまた半年を費し、十八年一月頃に脫稿し、六月に印刷出版された。それが名著『時と永遠』であつて、先生の體系的な獨創的思索と該博な學識とに加うるにその根本的な動機をなす、永遠の宗教的生に對する崇高な敬虔が紙面に滲み出ている。先生自身も之を以て學究生活五十年の冠となすことを意圖して居られた。

しかしこの『時と永遠』は老弱な先生の殆ど全精力を傾けての勞作であつた。しかもその間に戰爭は日毎に激化して防空作業が強化され物資も不足して、先生のような世流と非協調な者の困難は次第に加わり、その上八重子さんの健康も勝れないで家事を見ることも出來なくなつたのでなほ更であつた。それでも書物の完成した頃は流石に嬉しく、十八年五月頃から秋に亘つて日本神學校からの依頼に應じて隔週に十回講義を試みて、その論旨を講述したりされた。

十九年は國民の誰もに取つてと同じく、先生にも日々の生活と健康とを維持するのに精一杯のようで、食料と醫藥とを得るのに苦心されている樣子は氣の毒であつたが、私などにもどうすることも出來なかつた。秋頃から空襲が始まり、十一、二月頃には東京の西郊が多く被害を受け、先生の住居の一二町近くの家に爆彈が落下して全壞したりしたこともあつた。そこで先生はついに地方疎開を決意され、二十年三月末に八重子さんの實家の鄕里が岩手縣千厩町にあつたのを頼つて移られた。そこは本線からはずれた小さな田舍町であつたが、ある家の二階を賃借りし、八重子さん一家の心からの好意によつて比較的に平

和な生活を樂しみ、語る友は少いが讀書に日を送られた。その頃常に親しんだ書物としては、ギリシア語新約聖書と舊約はメンゲの獨語譯、ギルデマイスターのダンテ『神曲』の獨語譯、プラトンのギリシア語原典殊に『律法篇』などがあつたらしい。疎開先きで書物も自由ではなく參考書などは殆どなかつたので、知友から借用されたことも多くあつたろう。私などもエウセビオス『教會史』を用立てたことがあつた。

終戰による平和の回復は先生に言い表わし難い大きな喜びであつた。先生は天皇の英斷に心からなる讃辭を捧げ、東久邇內閣に收拾の責任を期待した。その後物資缺乏の一年有餘は苦しく、殊にインフレによる物資高騰は一定の收入の全然ない先生には殆ど萬策盡きたかのような不安を齎らした。しかし丁度幸いに玉川學園の小原國芳氏から先生を迎えたいとの申出があつたので、交渉を重ねた末に喜んで受諾することを決し、先生のための小さな住宅の新築されるのを待つて二十二年春四月に上京し、五月には玉川學園に移られた。粗末な小住宅ではあつたが、小丘を北に負い、南に池を見て眺めは悪くないので、環境は先生の晩年の靜居に適していたと言えるだろう。家庭的には雄二郎君夫妻と三人暮しの落着いた生活を營み、大學でも講義を始められたが、事務關係には一切携わることなく、老學者に適わしいとは言えないにしても兎に角自由な境遇を保たれたのは幸いであつた。精神は確かで少しも老衰を感ぜしめなかつたが、身體は次第に不自由を訴え、その後一回も東京に出られたこともなく、ただ學園內の短い散歩が精々であつた。然るに二十三年になつては兎角健康すぐれず、腸出血を見、醫師の診斷の結果直腸潰瘍とのことで、ついに八月初東大病院福田外科に入院して手術を受け、九月更に第二回の手術の後月末に退院することを得た。しかしそれ以來は全く病床に臥し、身動きも容易でないのみか、痛みの激しいために注射の回數も次第に多く、翌年夏以後は症狀ますます思わしくなく、毎日の注射回數も多い時は十數回に及ぶ程であつた。十月頃非常に悪化したことがあり、親戚友人等も集まつたりしたが、その時は幸に一時持ち直すことが出來た。病中は八重子さんと令弟達夫君夫人とが專ら看護に當られたが、その後日增しに衰弱され、それでも辛うじて年を越し、翌二十五年一月いよいよ重態に陷り、十七日午前八時についに安らかな眠りに就かれた。享年七十二才であつた。十九日午前十一時玉川學園講堂にて告別式を行い、下落合火葬場にて荼毘に附し、二十一日午後一時信濃町教會に於て葬儀を執行し、京都以來多年先生の薫陶指導を受けられた山谷省吾牧師が葬儀の辭を述べられた。墓地は雜司ヶ谷で、先生自ら夫人のために設けられた墓に葬むられた。

病床にあつては八重子さん始め親しい人達の懇ろな看護と知人らの時折りの訪問を深く感謝して居られたが、殊に二十三年岩波書店の布川角左衛門君の盡力による全集の計畫を最も喜び、自から編纂を注意された。之が先生の病のまだ餘りに重態とならない中に完成されたのはよかつたが、親しい友人に贈るのに署名することは思うに委せなかつた。しかし之に對して十一月には毎日新聞社の出版文化賞を贈られ、また之に先だつて

九月に學士院會員に推されたことに對しては、苦しい中にも限りない歡喜を覺えられた。

先生は平常決して他人の言動を批評したり容嘴されなかつた。人は各々自分に責任を持つべきもので、他から兎や角論議さるべきではないと共に他に對して餘計な忠告がましいことを言うべきでもないと考えて居られた。人格的な獨立は絶對であるという意見であつた。それだけに自分の私事や殊に內的な問題について濫りに他人に打明けることも相談することもなかつた。先生が信仰に關して、自分からも多く語らず他人の話をも聞こうとされなかつたのはそのためであつたと思う。しかし學問上の意見や何かの形で信仰上の態度を間接的に表明されたことはなくはなかつた。それで私など長い間に先生の信仰上の態度をそれとなしに察知するようになつたが、演習などに出席された人は更によく之を經驗されたかと思う。何れにしても先生は既に早く大學卒業後に植村正久牧師に接して——之れには五味欣造、佐藤紅綠等の諸氏との交遊が關係していたと察する——人格的な感化を受け、同牧師から洗禮を授けられてクリスチャンとなられた。しかし所謂教會的ではなく可成り自由な良心に基く態度を守つて居られた。ドイツ留學後宗教史學派神學の影響を受けて一層自由な內的敬虔の宗教に傾いたらしい。それでも歸朝後は植村牧師と親しく交り富士見町教會で毎日曜日聖書ロマ書講義をなされたこともある。しかし健康を失つてからは教會禮拜に出席することも稀であつたが、聖書などは常に座右に置いて愛讀された。京都では室町教會に屬し、晩年上京されてからは親しい山谷省吾氏に賴つて信濃町教會に轉籍された。病重くなつてからは山谷牧師と信仰上の話を交わされ、後事を託されたという。令弟良夫氏が熱心なクリスチャンで、先生に對して屢々より實際的な信仰生活を要求され、先生もその忠言を喜びながら學究生活との調和について具體的な解決が困難であつたらしい。良夫氏は海軍々人の出身でありながら戰爭に對して最も深い憂慮を抱き苦悶して居られたが、戰爭の漸く激化しようとする頃十七年一月に急逝された。それは先生の宗教的生活にも淋しい影を殘すものであつた。

その他先生の追憶を書いたら限りないが、餘りに紙面を費すので、先生の生涯を語るに留めよう。

波多野精一先生の追憶

山谷省吾

一

波多野精一先生の講義を私が初めてきいたのは、古い話で、大正四年の四月、その當時の東京帝大文科大學の一教室に於てであつた。法科出身の私は、卒業後しばらく地方で官吏をつとめていたが、間もなく止めて東京に歸り、基督教の學的研究に志し、着手したばかりの所であつて、一友人の紹介により聽講者たる許しを得たのである。先生の講義題目は「ギリシア哲學史」

であつた。聽講者は二十名内外と記憶する。私は先づ、先生の堂々たる體軀と、その悠々せまらない講義振りに驚かされた。これは巨人的な存在だなと言う初印象を受けた。そして、講義内容は非常によく準備された、整つた、精神に滿ちあふれたものであつた。先生は大きな字を書いた大型のノートによつて、ゆつくり、力を入れ、演ずるような口調で語られた。私はその一語一語が私の腦裡に深く刻みつけられ、自分でそれを直ぐ繰り返すことが出來た程であつた。私は深い興味を覺え、感激を以て、身體全體を耳にしてきいていた。休講の揭示が出る時には大きな失望を禁じ得なかつた。ギリシア哲學は私にとつては「未知の國」であつたが、先生の御蔭で、聽講の度を重ねるに連れて、急げきに理解を與えられるようになつた。兎に角、四年間無味乾燥な法科の講義をきいた後であつただけに、先生のギリシア哲學の生き生きした講義は私を捉え、學問の世界はこんなに迄興味の深いものであるかと驚嘆させられ、私の眠つていた眞理に對する眼を開かせて呉れたのである。先生はその當時四十歳前後であつたと思うが、既に大家の風格を備えておられた。

私はその講義ではじめて、ヴィラモヴィッツと言う名前をきかされ、先生の御宅を伺うて、彼の「ギリシャ悲劇」を拜借したのを記憶している。哲學史の講義中に、相當に詳しく悲劇詩人の思想を取扱われたのは、その講義が宗教思想史的のものであつたことを示し、先生が當時既にギリシャの宗教に深い關心を持つておられたことを語つている。「西洋宗教思想史」の中で書かれている樣に、ソクラテス・プラトンは、悲劇家の遺した人間の問題を受繼いで、その解決の爲めに立ち上つたのであつて、ギリシャ哲學の特徴をそこから捉えようとされたのが、先生の意圖であつたのである。アテナイがギリシア人の教養の道場となり、多くの勝れた人々が人生問題についてそれぞれ發言したが、その課題は最後に哲學者たちの手に委ねられたと云うことを、先生は常に高調されていたように思う。

この講義はその後一年間つゞき、ソクラテス・プラトンからアリストテレスの初めにまで及んだ。先生はプラトンの著作の年代決定の問題についての諸說と自らの見解を明かにされ、又プラトンのイデヤを價値と解するナトルプらの見解に同意し難い旨を述べられ、後の「宗教哲學」の中に開展されているギリシアのイデアリスムの發芽とも言うべき見解を示されていた。又先生が、アリストテレスから出たものとして傳わつている「私はプラトンを愛するが、眞理をより多く愛する」という言葉、並びに彼が死ぬる時、妻の傍に葬つて呉れと遺言したと言う話も、この講義の中できいた。――私はその後度々先生の講義をきゝ、又個人的にも親しく交る光榮を得、その間に極めて澤山の賜物を與えられたが、今から振返つて見る時、一番初めにきいた「ギリシア哲學」の講義ほど深い感銘を受けたものはなかつたと言わざるを得ない。それはたゞ、私の主觀ばかりではないと思う。先生がもし哲學史の講義を擔當して居られたら「時と永遠」に匹敵するような素晴らしい「西洋哲學史」が作り出されたに違いないと思う。先生が「西洋哲學史」を著わさ

れないで逝かれたのは、如何にも殘念なことである。

二

波多野先生は、大正六年に、京都帝大文學部教授として赴任され、宗教哲學と基督教學の講座を擔當されることになつた。私はしばらく金澤に行き先生から離れていたが、大正九年に三高教授として京都に來たので、再び先生の許で教を受ける幸に惠まれた。私は先生の「宗教哲學」と「原始基督教」との講義に出席し、更に新約聖書の中のヨハネ傳、ロマ書、コリント書などのギリシヤ語原典による講讀の時間にも出席した。當時私は東京で受けたほどの强い感銘は受けなかつたが、勿論、先生は私の研究の上に多大な教示を與えて頂いた唯一の教師であつた。京都では殊に、先生の御宅を極めて屢々訪問し、直接に指導を受け、學問について種々の話を承ることが出來た。此は何物にもかえ難い尊い賜物であつた。先生はダンテを非常に好まれ、驚くばかりに精讀されていた。又音樂の好愛者で、西洋から直接にレコードをとりよせ、又書物によつて學びつゝ鑑賞されたほどの熱心さであつた。私は先生の友人としても親切と好意とをうけ、相當に親しく交ることを許されたが、學問上の師弟關係に隔てられて、ある限界をこえて交りをすることが出來なかつた。しかし先生が京都を去られて後には、この關係が變つて來、人間としての先生についてより親しく知るようになつた。

さて京都に於ける先生の「原始基督教」の講義であるが、これは幸にも講義の草稿が破棄から免れたので、昨年岩波書店から出版され、それによつて先生の講義の内容を知ることが出來るようになつたのは、喜ばしいことである。その「原始基督教」には、石原謙博士の詳しい序文がついている。がそこにも述べられているように、先生は既に「基督教の起源」なる同一對象を取扱つた書物を、明治四十一年に出版されているのであつて兩者を比較しつゝ繙讀すると、すこぶる興味の深いものがある。私は先生の特色は「基督教の起源」の方により多くあらわれていると思う。此書物は我國に於ける基督教の學問的研究の先驅をなすものとして、獨特な地位を占めるもの、丁度先生の「哲學史要」が日本の哲學界に於て占めるような地位を占めていると思う。その當時まで、日本の基督教會には、神學校はあつたが學問的神學は未だ產れなかつた。その後も久しく出て來なかつた。然るに、先生のこの書物の出版は、ドイツ神學界に屬する最も勝れた書物が、突如として日本の地盤に產れたようなものである。もし此がドイツで出されていたとしても、必ずや第一流の書物として名聲を獲得したに違いない。基督教の原始時代の歷史が、簡潔に明快に、發展の重要な契機を凡て網羅しつゝ、その當時の學問上の問題をとり上げ、それらの一つ一つに對する一定の態度を示しつゝ、獨特な文體を以て敍述されている。そこに潑溂たる若々しさと、他をおそれず眞理にのみ耳を傾ける大膽さと、然し極端に走らず、基督教初代の信仰と精神とを歪めず曲げずに把握し得た深い理解とが、此書を通じて表わされている。四十數年を經過せる今日でも、この書物はわが

基督教界にあつて必讀のクラシックであると思う。單に基督教界ばかりではなく、日本の思想界全體についても同樣であると思う。

先生の基督教研究の熱情は、後に至るまで續いた。しかし、宗教哲學への興味と責任とは、先生をして基督教の歴史研究から離れるの止むなきに至らしめた。ギリシアの研究についても同樣であつた。勿論プラトンやアリストテレスやプロティノスの原文講讀は、毎年つゞけて爲されたが、最早や西洋宗教史の研究としてゞはなく「宗教哲學の基礎かためとして、その素地として爲されたのである。先生は實に用意周到の學者であつた。知らないことは知らないと言い切り、その代り知つている事については、非常な自信を持ち、誰でも説得せねばやまない情熱の所有者であつた。だから、自分の使命は宗教哲學の形成にありと、一度態度を定められた以上は、凡てをこの體制に向けて整理せねばならなかつたのである。かくして先生は、昭和の初め以來、基督教の講義からは次第に手を引いて、專心宗教哲學に身を委ね、精神力をそこに集中して、精進せられた。之が爲めに、基督教關係の事項について言うならば、歴史神學よりも組織神學の領域に遥に多くの注意を向けられ、當時のドイツ神學の傾向と歩調を合せて、ますます讀書圏をその方面に擴げられた。バルト、ブルンネル、オットー、ハイム、「アルトハウス、シューマン、ケッブ、ニグレン、ホル、此等の學者の思想について、その當時いつも私は先生から聞かされたのである。又アウグスチンやトマスなどもその當時隨分はげんで讀まれた。先生は客觀的正確に思想內容を把握する非常に勝れた才能を持つておられたが、その得た知識を自己の組織の中にとり入れて、それを生かし、自分の體驗から解釋して、獨特な宗教哲學を作り上げられた。その組織の爲めに大變な思索力を發揮されたのであるが、參考資料を獲得する爲めにも、多くの時間と精力とを費されたのである。

先生がかく努力されたのも、一面無理はないと思う。なぜなれば、宗教哲學を作り上げる爲めに、先生は自分の立つ哲學的立場をかえる必要に迫られたからである。先生は初めは新カント派の立場をとつておられた。大正九年（一九二〇年）に出版された「宗教哲學の本質及其根本問題」は、カント主義の上に立つての論述である。しかるにその後、哲學界の傾向の變化に伴うて、先生もカント的理想主義に固執し得なくなつて來られた。そのことは、すでに大正十五年の同書增訂版の序文にも言及され、「著者の思想の幾分の變遷」と言われてをるが、昭和十年の「宗教哲學」を見ると、「幾分の變遷」ではとてもすまされない變化である。そこに示されているのは、まさしくリヤリズムの立場である。先生は「宗教に於て自我は現實世界を超えて遥かに高き實在との關係に入る。宗教はその對象の實在性を無制約的に肯定する」と言われている。かく立場をかへて新しい組織を作り出す爲めの産みの苦しみが、先生にとつては昭和初期の十年を通じて爲されたのである。先生の新しい世界は一歩一歩、徐々に開かれた。だから「宗教哲學」を讀む時、それは次々に書き足されて作り上げられたものであると言う印

銘を、私どもは強く受ける。それ丈に先生の産みの苦しみは大であつたのである。

それに比べると「序論」も「時と永遠」も、首尾一貫した、よくまとまつた、讀んですつきりする書物である。「時と永遠」は先生の東京に移つてから後に書かれたものであるが、遺族の御話では、先生はそれを集中的に短日月の間に、謂はゞ一氣呵成に書き上げられたそうである。且つ先生も「時と永遠」については、頗る自信を持つてをられた。それは先生の手紙や文談話によつて知ることが出來る。その後、先生は岩手縣の千厩町に疎開されたが、もう學問的努力を續ける力がなくなつたと言はれ、讀書はプラトンとダンテと聖書とを教養的に讀まれたのに過ぎなかつた。即ち先生の最後の十五年の學問的精進は「三部作」の著述に集中されたことが解る。先生はそこで、精力の凡てを使い果されたのである。且つ自分の地上に於ける使命はそれで爲し遂げられたと言う、喜と滿足とをいだいて餘生を送られたのである。

先生は學者としての深い自覺を持ち、使命感をいだいておられた。そしてその使命を貫き通されたのである。講演も雜誌への寄稿も一切ことわつて、專ら書齋の生活に終始し、比類まれな學問的教養をつまれたのである。その知識は博く、その識見は實に高かつた。しかし、それに比べると、先生の著作が餘りにも少いのに驚く。殊に西洋哲學史の著述を遺されなかつたことを、殘念に思う。然し先生の著述を注意して讀むと、そこには非常に澤山の思想が壓縮されていて、思いも設けぬ財寶がちりばめられていることに氣づくであろう。私は先生の著述をゆつくり繙讀する人々が、これから多く出て來ることを望むし、且つ必ず出て來るであろうと思う。

波多野先生のこころざし

西谷啓治

一

波多野先生畢生の業績である宗教哲學體系の建設は、『宗教哲學』(昭和十年)、『宗教哲學序論』(昭和十五年)、『時と永遠』(昭和十八年)の三部作に於て成就されてゐる。此等の述作はわが國の宗教哲學を、初めて現在の世界に於ける最高の學問的水準にまで齎したものである。寧ろ、近時世界の學界を通觀して、宗教哲學の分野に於ける大著の寥々たる折柄、先生の體系は量的にも質的にも、その右に出づるものを容易に見出し難い勞作であり、また、わが國の學界にとつて一つの古典となるものである。先生の業績に於ける質的價値をなすものは、思索の强靱と透徹や敍述の彫塑的な明澄のみならず、何よりも思想の獨創性である。それは、宗教哲學は宗教的體驗の反省的自己理解であるべきであるといふ先生の根本的立場に既に現はれてゐる。

西洋に於ける從來の宗教哲學には大別して三つの立場が現はれ、然も其等のうちでは、宗教本質論と方法論とは離れ難く結びついてゐる。その所以は、生のあらゆる分野のうち特に宗教は哲學をも超えた超合理的なる內容を含み、學的な把捉に逆說的に矛盾するとすら考へられ、從つて正しからざる方法による把捉は、宗教の本質に對する理解を全く歪曲するからである。第一は、宗教を心理的・社會的なる事實として研究する經驗科學としての宗教學の實證主義的態度を、そのまゝ哲學の立場に移行せしめたもの、卽ち實證主義的な宗教哲學である。それはコントやフォイエルバッハその他に見られる如く、本來の意味での宗教をイリュージョンとして否定せざるを得ないといふ歸結に達する。その故は、かゝる把捉が宗教的な生をその生自身の內に入つて把へる代りに、その外から、單に事實として、捉へるからである。內に入る時、その生は主體としての自我と絕對的實在者との關係を含む。然もその關係は、一切の相對的實在に對する自我の關係を根本より覆滅しつつ現はれる如き、高次の關係であり、それが宗教的な生に特有な內容をなすのである。第二に、實證主義的な宗教哲學と對立するものとして、絕對者と自己との關係といふ宗教の本質を、理性の立場から捉へんとする合理主義の宗教哲學がある。その最も有力なるものはイデアリズムの宗教哲學である。併しこの種の宗教哲學は、絕對者の超越性にも實在性にも觸れ得ず、絕對者を單なるイデーに化する。また、トマス・アキナスの如く理性とその認識を超えた神の啓示に宗教的な生內容を認め乍ら、然もそれを單に「超自然的」として自然的理性の合理主義と妥協せしめる如き超自然主義も、實は合理主義と異合せをなすにすぎない。第三に、所謂辯證法神學者の如く同樣に啓示を中心としながら、然もそれの神學的論究に於て基本となるべき哲學的原理の問題に對して單なる便宜主義をとる如き立場である。その立場での宗教哲學も、哲學の精神を無視する限り誤れる宗教哲學の一つである。故に正しい宗教哲學は、合理主義の宗教哲學と異つて、あくまで生の根源的事實としての宗教的體驗そのものに立脚せねばならぬ。然もその事實的體驗は、實證主義の考へる如く單なる心理的現象ではなくして、絕對的實在者との間の人格的な生の共同そのものである。宗教哲學は、かかる宗教的生の獨自な內容に立脚しつつ、然もその生內容を根本的原理的に、卽ち嚴密な意味に於て哲學的に、反省すべきであり、辯證法神學者の宗教哲學は、この後の點に缺陷がある。故に、宗教的體驗の自己理解といはれる先生の宗教哲學の立場は、從來の宗教哲學に於ける諸々の主要な方向を批判し、然も夫々の含む一面の眞理性を綜合的に統一せんとする意圖を示すのである。

右の如き立場を方法論的に樹立したものが『宗教哲學』及びその展開としての『時と永遠』である。『宗教哲學』に於ては、宗教的對象としての神は「實在する神」であるとされ、それは先づ「力」の神として規定される。第一に擧げた實證主義の理論が多く依據する如き原始宗教に於ては、神の觀念は主として「力」の神として考へられる。それは一層進んで「眞」の神と

して規定される。第二に擧げたイデアリズム及び神秘主義がそれを代表する見地である。併し神との人格的な共同關係といふことに於てのみ、實在する神が、「愛」の神として眞に宗教的體驗の對象となり得る。かゝる人格主義に立つて先生は、愛、神、聖性、創造と惠み、時と永遠等の如き、宗教哲學の基本的問題に就て透徹した思索を展開されてゐる。然も宗教的體驗に於て絶對的實在は恆に象徴としてのみ現前して來るといふ象徴主義をとる。それは上述の超自然主義や辯證法神學などの宗教哲學とから、先生の立場を全く分つものである。

右の如く、先生の宗教哲學は、歐米にもその類を見ない獨創的な立場であり、然もそれは單に奇を求める意味に於てではなく、學問的な批判と思索の正道を踏んで到達された獨創性である。その批判の周匝と思想の體系的完備とがそれを示してゐる。『時と永遠』は、以上の如き博士の立場から生とか死とかに本質的である時間の根源的構造といふ問題を軸として、自然的生や文化的生との關關に於て宗教的生の構造を綿密に究明したものであり、博士の思索の深さと組織力とを最もよく現はし、わが國に生み出された最も高き思想書の一つである。先生の宗教哲學體系の全業績は、わが國の思想史上に於ける古典として何時までも殘るであらう。

(二)

波多野先生の風丰に初めて接したのは、私が京都の大學に入學した大正十年の春のことで、宗教學の普通講義の第一時間目であつた。そのとき教室のドアーを排して入つて來られた先生の姿は、今なほ私の眼底に刻まれてゐる。その堂々たる體軀には如何にも學者らしい威嚴が具はり、同時にどことなく氣品の高さを感じさせるものがあつた。講義をされる時の言葉にも擧止にも、内から出る節度があり、innere Form といはれるやうなものがあつた。その後でも先生に接する度毎に、何か大きな岩石にでも觸れるやうながつしりとした感じを受けたが、粗野な力を感じたことは一度もない。先生はまた反面非常に情の細やかな人であつたが、優柔とか柔弱とかいふ感じを受けたことは嘗てなかつた。先生に於ては性格の強さと情の濕かさといふものが、渾然と一つになつてゐた。先生には單なる纖細ではない、線の太いエレガンスともいふべきものがあつた。それは恐らく本當の意味での教養の高さといふものから來る感じであつたと思ふ。

卒業してから間もなく、シェリングの自由意志論を飜譯することになつて、原書に出てくる古典の引用句などについて疑問をお聞きするために、時々先生を訪問した。それが個人的に先生に接し出した初めだつたと思ふ。それからは、手紙で教を乞ふことも度々あつたが、先生は何時も實に綿密に調べて答を與へられた。御自分でもはつきりしない所は、田中秀央先生に質された上で返事を下さつた。さういふ時には先生の深い親切と、一字一句もおろそかにしない學究的な良心の嚴しさとを、同時に感じさせられたのであつた。さういふ性格の強さと溫かさ、學問的な嚴しさと情愛の篤さといふものが、先生の著書に

もよく現はれて居り、先生の學風のもとになつてゐるのではないであらうか。

先生の學風といへば、今でも思ひ出す一つの小景がある。やはり私の卒業前後のことと思ふが、その當時、毎月行はれてゐた哲學茶話會の席でのことである。その時分は學生の數も少なかつたためか、哲學の茶話會に波多野先生や哲學史の朝永三十郎先生なども時々出て來られた。倫理の藤井健治郎先生が顔を出されることもあつた。或る時、西田先生と波多野先生とが向ひ合つて座られ、何かの話の續きに西田先生が、「波多野君、どうもヴィンデルバントの Lehrbuch なども餘り感心しないね」と言はれた。すると先生は「いや、あれは立派なもんだ。寧ろ、ろうと向きの哲學史だ」といふ意味の答をされた。その「ろうと向き」といふ言葉が妙に私の記憶に殘つてゐる。西田先生の批評には西田先生の見識が現はれてゐるが、波多野先生の評價にはまた波多野先生の學風が現はれてゐると思ふ。

○

私自身は西田先生のもとで學び、先生の影響を最も強く受けて來たので、その後波多野先生のもとで講義を助けるやうにと言はれた時には、何とはなしに不安を覺えた。それ以前にも或る時、田邊先生から、「君の文章は不明瞭だから、例へば波多野先生みたいに knapp und klar に書くやうにしたら」と注意されたことがあつて、自分でもその氣になつて色々やつて見たが、結局身につかなかつた。波多野先生のもとで講義をするやうにといふ話をしに來られたのは、當時まだ京都に居られた和辻哲郎先生であつたが、和辻先生はその時、宗教學の研究に專念するやうにといふ波多野先生の私に對する意向をも傳へられた。その時分、私は宗教學とは別の方面のことをやつてゐたので、波多野先生がさう要求されたのは當然のことであつた。しかし私には、ひたすら學究として自己を刻み上げて行き、そのためにはそれ以外のものへの興味を一切斷つことをも辭しないといふ、先生の強い態度にはついてゆく自信がもてなかつた。また宗教學といふ一つの領域に自分の學問を限定する決意もなかなか出來なかつた。

和辻先生につれられて田中西浦町にある、叡山電鐵の線路に沿ふた波多野先生のお宅に行つた時も、先生の口から同じ意向が洩らされた。その歸り途に自分の疑惧を和辻先生に話すと、先生は「それじや西田先生の所へ寄らう」といはれた。西田先生の田中飛鳥井町のお宅は、波多野先生のお宅から歩いて五分ぐらいの所にある。西田先生は、或る學問をやる以上それに專心するのは當然だ、しかし別に自分の學問を狹く限るにも及ぶまい、と言はれた。そしてその言葉に力を得て自分の決心もついたのであつた。

以上、私事に渉ることで氣が引けるが、當時の私は兩先生の學風の板挟みに會つたやうな氣持で、その相違を自分の身にじかに感じたのであつた。兩先生の不朽の業績は、夫々の學風に徹するところから生れたともいへるが、西田先生の學風には、先生にして初めてよく爲し得るといふところがあり、波多野先生のそれには、誰でもが模範となし得るといふ普遍性がある。

それはヨーロッパの學者にも通ずるものであつて、先生自身も自覺的にさういふ行き方を取られてゐたやうに思ふ。

○

ところで、先生のもとで講義することになつて見ると、先生は實に寛大であつた。學問をする態度の上では非常に嚴格であつても、學說や思想の上では全く自由で、例へば私が今後は佛教をも宗教學の問題にして行きたいと言つた時も、先生は卽座に賛成された。先生に接する機會が繁くなるにつれて、その純粹で溫い人格も一層深くわかり、先生に對する心からの親しみが急激に生じて來た。先生は非常に音樂が好きで良いレコードを數多く集めて居られたので、二三の友人を誘つて聞かせて頂きに出かけた。それが例になつて、先生から「某日の夕方から例のレコード・コンサートをやりたい」といふ葉書が度々舞ひ込んで來た。夕食にはきまつて鰻丼を御馳走になり、それから夜おそくまでモツアルトやベートーヴェンなどを聞かせて頂いた。仕舞には我々の吸ふ煙が立ちこめて部屋一杯になつた。今になつて考へると、先生の規則正しい生活を隨分無遠慮に掻き亂したことだと思ふ。

先生があれほど音樂を愛されながら、先生の書かれるものが音樂的といふよりも寧ろ彫塑的であるといふことは、私には何時も不思議であつた。しかし何時だつたかグルックの音樂を聞きながらさういふこともあり得るといふ感じがしたことを覺えてゐる。キエルケゴールは音樂を感覺的天才性といふ言葉で規定し、感覺性はキリスト教を通してさういふ積極的な意味をもつて來たと言つてゐる。つまり、キリスト教は感覺性を否定し精神をそれから引離すといふことによつて、反つて感覺性をも積極的にしたと考へるのである。その際彼が考へてゐるのは主にモツアルトのことであるが、しかしグルックの音樂からは、どことなくギリシアの彫像に通ずるやうな、眼に見えない「かたち」の美が感ぜられる。それはあながちイフィゲニーとかオルフォイスとかを取扱つたからといふだけではあるまい。精神のみが見得る美しいかたち、形なきかたちとしてのイデアが、その純粹に「古典的」な意味において、音の流動のうちから髣髴として來る、といふやうな趣がグルックにはある。『シラーの談話』といふ本を讀むと、シラーは當時モツアルトの擡頭によつて蔑にされがちなグルックの音樂を擁護してゐるが、そのシラーの詩にも同じやうな、音樂的律動のうちから感取される「かたち」の美といふものがあるといへるであらう。またそこに、シラーの藝術の特に「古典的」な性格があるともいへるであらう。しかもそのことは、シラーがカントの Idee の哲學に牽きつけられたことと深く結びついてゐるとも考へられないことはない。

それはともかく、波多野先生の人格にも、音樂的なものと彫塑的なものとを一つにしたやうなものが、根本にあつたのではないかと想像される。先生の學問の二つの基柱であるキリスト教とギリシア古典哲學とを、簡單に音樂的なものと彫塑的なものに比論するのは勿論愚なことである。しかし學究としての嚴しい純潔とその奥にある人間的な情愛の溫さ、端正で典雅な文

章とそのうちに籠められてゐる情意の強さ、ギリシア的なものとキリスト教的なもの、彫塑的なものと音樂的なもの、さういう色々な形で現はれる二つの面を統一してゐるやうなものが、先生の人格の底にあつたとは言へると思ふのである。

先生の死によつて、わが國は明治以來の最大の學者を一人失つたが、私はそれと同時に最も尊敬する師、親愛する長上の一人を失つた。この氣持は、心から信頼しうる人をもつといふことが如何に稀れな惠みであり、如何に貴重な天與であるかを知る者のみが感じ得るであらう。ここに謹んで、先生在天の靈の冥福を祈る。

〔追記〕 此の短文の(二)は波多野先生が亡くなられた直後、玉川學園の雜誌『全人』の求めに應じて書かれたものである。本誌の編輯者からこの記念號に執筆を求められたにも拘らず、遺憾ながらその遑がなかつたため、止むを得ずそれを轉載させて頂いて責を塞ぐことにした。讀者の御諒承を乞ふ。

ひとつの私的回想

——波多野先生と古典研究——

田中美知太郎

一

私が京都大學に入學したのは、大正十二年(一九二三年)で、波多野先生の聲咳に接することができたのも、その時が始めてであつた。しかし先生の「西洋宗教思想史」(希臘の卷第一)がその前々年ころに出てゐたし、「基督教の起源」や「哲學史要」によつても、先生の名は、既に私には親しいものになつてゐた。否、それどころか、當時の「哲學研究」に出てゐた、文學部の講義題目によつて、先生のプラトンやプロチノスの原文講讀があるのを知つたことが、カトリック系の傍系學校にゐた私に、京都行を決心させた要因の一つになつてゐる。無論、當時の私は、未だいろいろな要求に動かされ、希望的には種々の可能性を追つてゐたわけであるが、ギリシアへの憧憬は、私を動かす最も強い傾向であつたと言ふことができるやうに思ふ。ところが、カトリック系のドイツ人教師の教養は、當時の私のこのやうな要求を滿足させてくれるものではなかつたので、京都大學哲學科の演習や講義が、遠くから私を招いたわけで、當時の私には、この一角だけが光明の場所であつたと言つても、それほど誇張にはならないやうに思ふ。ところが、いざ東京から京都へ來て、毎日緊張した氣持で學校へ出て行つてみても、先生の授業は一向に始まらなかつた。毎度、「波多野教授本日休講」なのである。やつと五月になつて、今日も休講かと思つて出て行つたら、先生の講義があつた。お顔も身體も大きい先生の印象は、線像とまるで違ふものであつた。いきなり講義を始められないで、大學の精神といふやうなものについてのお話があつた。大學といふところは、自分で勉強するところで、講義のノートを取つたりするのは、本來の勉強ではないといふやうなお

話であつた。また大學の教師は、いちいち學生の世話をやいたりはしないが、しかし學問について知るのには、教師に個人的に接觸することも大切であるからとて、面會日を敎へられた。そして古典語を學ぶことの必要についても、特別の注意があつた。そのお話の間、先生はお顔を左から右へ、右から左へと、規則正しい位に向け變へながら、眼鏡越しの大きな眼を、私たちの頭上を越えて、ずつと後の方へ注がれた。私は恐しいやうな、可笑しいやうな氣持で、先生は非常なはにかみやなのだと判斷した。

その後、先生の面會日に、お宅をお訪ねした。田中西浦町といふのは、何だかごたごたした所のやうに記憶してゐるが、先生のお家は、空地の眞中にあるやうな印象で、いくらか殺風景な感じであつた。女中さんが日本座敷に案内してくれたが、無風流な私の眼にとまつたものは漱石全集と兩陛下の寫眞だけであつた。しばらく待つてゐると、先生が衣服を改められたらしい恰好で出て來られて、きちんと机の眞向ふに座られたが、甚だ閉口であつた。當時の私は、大學に來る前に出入してゐた、ある種の團體の氣風を受けついで、禮儀作法にはむしろ反抗的であつたから、どの先生のお宅へも、靖流しのままで出かけて行つた。ずいぶん失禮な話である。ところが先生は、禮儀正しく、ていねいな言葉で話されるので、少々弱つた。話題も平凡で、あまり面白くなかつた。それで二度目か、三度目の訪問からは、日常的な話題は飛び越して、いきなり先生に議論を吹きかけることにした。今から考へると、私の幼稚な議論の相手をされるなどといふことは、先生にとつては迷惑千万なことだつたに違ひないと思はれる。なんとも恐縮に堪へないことである。しかしこの議論で、先生がよく勉强してをられるのに、生意氣ながら、感心させられた。無論、議論を吹きかけるなどといつたところで、當時の私に大した議論の種があるわけではない。キリスト教や宗教のことについては、ほとんど無智であると言つてよい有樣だし、ギリシアの勉强は、未だ夢中になつて泳いでゐる最中で、まとまつた考へは出來てゐなかつた。だから、その時までに私自身が、比較的熱心に讀んでゐたフィヒテとか、新カント派のリッケルト、ラスクなどを、主な話題にした。特にラスクの「判斷論」や「哲學の論理とカテゴリ論」などについては、當時いくらか熱中してゐたところだつたので、幾度も議論をむしかへした記憶がある。そして先生が、これらの書物も、ていねいに讀んでをられるのに敬服した。さういふ議論の間に、ドイツでは、ひとは誰でも自分のよく分る範圍のことで議論し、わが國のやうに、自分のよく分らないものを、虚榮のために論じたりすることはないと言はれたことがあつたが、先生もわけの分らない議論は一切されなかつた。先生の言はれることの根底には、いつも確實な理解と把握があつた。私は先生のこの學風を、今でも尊いものに思つてゐる。いはゆる人氣取りや、お祭りさわぎは、最も嫌惡されるところで、アインシュタインの來朝に際しても、一般の騒ぎ方を、むしろ恥かしいことだとされてゐた。

二

先生のお話には、ドイツと東京の話がよく出た。東京の話は私が東京から來てゐて、先生も東京育ちであつたために、共通の話題になる機會が多かつたわけだと思ふ。日本では、東京の山の手が一番住みやすいといふお話であつた。隣人とはほとんど没交渉に暮すことのできたやうな、戰前の山の手の個人主義的な生活を、小うるさいことの多い京都の生活にくらべて、そんな風に言はれるらしかつた。しかし先生の精神的故郷は恐らくドイツではなかつただらうか。いろいろの機會に、ドイツの思ひ出をなつかしげに語られた。段々とドイツぎらひになりかけてゐた私が、ドイツの悪口を言つたりすると、先生はしきりに辯護論をされた。戰時中、先生はナチスのやり方を非難されてゐたが、私がドイツは結局敗けるだらうといふ、私自身の意見をお話した時には、「私はドイツの敗北をねがふことはできない」と、やや厳しい調子で言はれたことがあつた。先生が大正十四年（一九二四年）京都哲學會で爲された「プロティノスとカント」といふ講演は、

「プロティノスとカント」――哲學的に特に惠まれたギリシアとドイツとの兩文化を代表するこれら二大思想家の精神と業績とによつて肥された地盤に、宗教の哲學的研究ははじめて豐かな實りを擧げ得るであらう」

といふ言葉で結ばれてゐるが、これはそのまま先生の御仕事の方向を示してゐる言葉のやうにも思はれる。そしてその先生のキリスト教もギリシア研究も、大體はドイツの學問を通してのそれであり、ドイツの學問を中心とするものであつたやうに思はれる。また事實、十九世紀から二十世紀はじめにかけての、ドイツの古典學その他の學問は、たしかに壓倒的な勢力であつたと言ふことができる。（キリスト教研究については、私は何も言ふ資格はないが、たしかドイツ留學中は、ダイスマンの新しい研究から、多大の影響を受けられたやうに聞いてゐる。未だ聽講者の極少いダイスマンの講義を、先生は特別の興味をもつて聞かれたといふ話であつた）先生の演習は、新約聖書とギリシア古典のほかに、カントとヘーゲルとシュライエルマッヘルのドイツ古典が、どれか必ず毎年用ゐられてゐた。先生の著書の中で論評を加へられてゐるのも、ほとんどがドイツのものではないかと思ふ。ただギリシア古典の研究については、ドイツ古典言語學界の大御所たるヴィラモウィッツ・メーレンドルフの意見とかいふことで、古典語教育の實際から見て、最近ではイギリスの方に歩がありはしないかといふことを認めてをられた。しかしプラトン解釋の問題でも、バーネット・テイラー説について語られるよりも、むしろコーヘン・ナートルップ説に對する批評において、熱心であられたやうに覺えてゐる。（無論これは、當時において一知半解の徒が、プラトンを讀まないで、ナートルップやコーヘンを讀み、それによつてプラトンを論評したりしてゐたので、先生の批評も、自然これらの解釋に向けられたものと解される。先生の解釋は、これらマールブルク派のそれを非とし、ヴィンデルバンド、マイエル、ラスクな

どの立場に同情され、特にラスクの論文を推稱されたりした）また大學を出てから後のことだつたと記憶するが、アメリカ出來の聖書註釋本を、一寸便利さうなので買ひこんで、何かのついでにそのことを、先生にお知らせしたら、とんでもない話だと、大へん叱られたことがあつた。そしてドイツの註釋書をいろいろ教へて下さつた。私が今もつてゐるゾーデンのテクストは、その時いただいたものである。またこれはもう少し後の話になるかと思ふが、法政大學の文學部で無理な講義をしてゐた頃、ジェーン・ハリスンの「ギリシア宗教研究序說」を材料に用ゐたことがあつて、先生に何か手紙で質問した時、輕く一蹴されてしまつた記憶がある。（これもギリシア研究の立場といふよりは、宗教研究の立場において、先生はハリスンのやうな行き方を是認されなかつたためであらうと解される）とにかく先生は、何でも分るといふやうな、知つたかぶりはされなかつたので、立場も見方もはつきりしてゐて、ごまかしの無いのが氣持よかつた。そしてそのやうな先生の立場といふものは、大體において、學問上のオーソドックスの立場であつたやうに思ふ。私見をもつてすれば、わが國の學界において、本當の理解をもつて、ヨーロッパ思想の正統に立たれてゐるのは、ほとんど先生唯一人ではなかつたかと思はれる。しかしわが國思想界の風潮は、最新の流行を追ふのに急で、ヨーロッパ思想の正統を無視して、いはば異端邪說のやうなものばかり輸入してゐる有樣なので、先生の立場は全く孤獨であつた。わが國においては、奇妙なことに、正統がかへつて異端なのである。私の手許にある昭和二十二年（一九四七年）十月の御手紙にも、

「私の如きは、態度においても、思想の內容においても、貴君とは異なる立場を取るものではありますが、わが國の所謂哲學界に對しては、やはり孤獨の感を禁じ得ぬものであります」

といふやうな言葉が見え、先生自身も先生の立場が、わが國の思想界において、どのやうなものであるかを自覺されてゐたやうに思ふ。しかし先生は、最後までこの立場を守られ、世の風潮には、どこまでも抵抗されてゐたやうに思はれる。先生が老年になられても、戰時中のあの思想的雰圍氣のなかにあつても日本精神とか、東洋思想とかいふことを、ほとんど話題にされなかつたのも、やはり同じやうな抵抗のあらはれであつたやうに思ふ。（しかし無論これは、日本思想や東洋思想の研究に、同情も理解ももたれなかつたといふ意味ではない。岩手縣の疎開地からの手紙で、なくなられた村岡典嗣氏の日本思想研究について、特にその名著「本居宣長」について、いろいろ教へていただいたことがある）

三

さきほど私は、先生がコーヘン・ナートルップのプラトン解釋を取られなかつたと言つたが、これについても思ひ出すことがある。私の大學三回生の時に、先生はプラトンの「ポリーテイアー」を演習に用ゐられた。たしかその第六卷（五〇七B）の文章の解釋で、先生からお叱りを受けたことがある。そこの

「一なるイデアを定立（ἀφορίζω）して、正にそれであるところのものと呼ぶ」といふ文章で、イデアをヒュポテシスの意味になるやうに讀み、先生の質問に對して、丁度「パイドン」を勉強してゐたので、それを據りどころにして――多分同書の一〇〇B、D、一〇七Bなどを據りどころにしたのではないかと思ふ――イデア說も一つのヒュポテシスであるとお答へしたところが、先生はこれに對して、やや激しい調子で、反對論をのべられたが、私にはよくのみ込めず、押問答みたいになつて、時間が來ても終らず、三十分近く後の時間にくひ込み、他の諸君に迷惑をかけてしまつた。後で考へると、私の解釋を、ナートルプ流のイデア卽ヒュポテシス說の意味に解されたわけで、イデアは決して主觀の Grundlegung のはたらきではないといふことを、しきりに强調されてゐたことが思ひ出される。後になつて私は、どうして先生は、マールブルク派のプラトン解釋に對して、あんなにむきになられるのですかなどと言つて、先生を苦笑させたものであるが、先生はこの當時流行のプラトン解釋に對して、たしかに神經質になつてをられたやうな氣がする。さきにも一寸觸れたやうに、當時の傾向として、プラトンなどは何も讀まないで、ナートルップやコーヘンの書物だけで、プラトンがすつかり解つたやうな氣になり、この解釋に從はない者を、プラトンそのものの理解が足らぬかのやうに見なす風があつたやうに思ふ。類例は今日においても、他の事柄についても、よく見られるから、想像は困難でないと思ふ。先生はこのやうな風潮を嫌惡されてゐたので、多少はプラトンを直接に勉强してゐるやうに思はれた私が、そのやうな安易な解釋の態度をとつてゐると考へられ、いささか心外の、さびしい裏切を感じられて、あのやうな調子の反對批評をなさつたのではないかと思ふ。

この例でも見られるやうに、先生はドイツの學問を愛してをられたが、しかしドイツのものなら何でもといふやうな、ドイツ崇拜家ではなかつた。ヨーロッパ文明の全體についても、本物の理解をもつてをられたが、わが國に入つて來る際物には、むしろ否定的な態度を取られた。さきにも言つたやうに、先生の立場は、正統派の立場であつた。自分の專門のことではないので、批評の當否は分らないけれども、いはゆる辯證法的神學に對しても、先生はきびしい批評的態度を取つてをられたやうである。この流行の神學は、キリスト教について、何の理解もないやうな人たちまでが、これを無批判に取り入れて、極端な場合には、天皇制やナチスの政治を理論づけるのに用ゐるやうな風潮さへ見られた。今日に至るも、一向に改まらない輕佻浮薄の風潮である。この間にあつて、先生の態度は實に頑固だつたやうに思ふ。しかしこれが正統派といふものなのだ。外國にはこの種の頑固派がいくらもあるらしいが、わが國にはほとんど全くない。だから、新しいものも新しさをもたず、反逆も反逆とならないのである。先生のギリシア古典學上の立場も、やはり頑固な正統派だつたやうに思ふ。昭和二十二年（一九四七年）一月にいただいた手紙が手許にあるので、その中から引用すると、

「私の感ずる所、信ずる所を率直に申せば、Jaeger の業績の如きも、かれの「アリストテレス」を除いては、大體二十世紀風の Modern boy 風のきざな哲學かぶれに蝕まれてゐますので、十九世紀の威風堂々たるものを缺いてをります」といふ風に言はれてゐるところなどに、その面目がよく出てゐるやうに思はれる。先生は氣のきいたやうな、新解釋の類を好まれなかつた。先生の「西洋宗教思想史」なども、その意味では、むしろ平凡で、あたりまへのやうなことしか書いてないとも言はれるであらう。歴史家といふものは、面白い思ひつきをすてなければならないといふやうな意味のことを、先生はよく言はれたやうに思ふ。右の御手紙は、私が「古典的世界から」をお送りした時、岩手からいただいたもので、私にも十九世紀的な學問をやれといふ御忠告だつた。そして、それは

「忌憚なく申せば、貴君の時折り雜誌に發表なさる論文の中には、あのモダンボーイがいささか頭をもたげてゐるものもあります。原典に親しむといふことを學が得ぬジャーナリスト的な、わが國の學者や評論家の間には、却つてそれらの方が受けがいいかも知れません。しかし私の考へでは、さういふ癖は玉にきずであります。私は貴君が年と共にますます圓熟を見られつつ大成を期せられることを、衷心より願つて止みません」

といふやうな、少々耳の痛い忠告にもなつてゐた。先生はヴィラモウィッツやベックの名をあげ、光榮にも、さういふ十九世紀的な巨匠の學風に、私のやり方もいくらか通じるものがあるといふので、私をはげまして下さるのだつた。（右の手紙のなかでは、イエーガーが少し酷評されてゐるが、しかし先生はイエーガーもよく讀んでをられて、イエーガーの論文の拔刷などを、是非讀んでみよといつて、送つて下さつたこともある）

四

話を始めにもどすと、先生の訪問日に、私は他の學生諸君と一緒になつたことはなかつた。ただ一度だけ、當時ギリシア語の講師をしてをられた菊池さんと一緒になつたことがある。その時には、取つときのブランデーがあるからといふので、それが出て、夕飯を御馳走になつた。（ふだんは、お茶と煙草だけだつたが、私は煙草をのむ習慣をもつてゐなかつた）先生は、深田、朝永兩先生と共に、文學部の三酒豪と噂されてをられたが、先生が酒をのみ、少し醉はれたのを見たのは、後にも先にもこの時だけだ。（これは私が野暮な學生だつたためかも知れない。先輩の三木、菊池、加川といふやうな人たちは、別だつたらしく、三木氏などは、酒に醉つて、失戀の訴へをして、泣いたりしたらしい話を聞いたこともある）醉はれた先生は、少し笑つたもうなお顔になり、菊池さんの遠慮のない批評に「何だつて」といふ言葉を、江戸辯の調子で言はれた。ていねいで禮儀正しく、神經質なはみかみやで、いつも窮屈な感じの先生も、こんな風にはめを外されるのだなと思つた。先生はブランデーを傾けて、更にビールを出せと言はれたが、私のやうな者の前で、これ以上醉態を示されてはとお考へになつたのだらう

か、奥様がお止めになつて、ビールはつひに出なかつた。しかし今になつて思ふのだが、酒がなくては、ざつくばらんになれないといふのは、先生の不幸ではなかつたかと思ふ。先生のいろいろな氣づかひは、このやうなはけ口を必要としたかも知れないが、それは先生の健康を蝕み、「波多野教授本日休講」の回數を多くしなければならなかつたやうに思ふ。先生は胃腸の故障を訴へられることが多かつたが、それは頑固に治りにくいものらしかつた。そしてそれが後の大患になるわけだ。先生はさういふ健康上の悪條件のなかで、宗教學とキリスト教に關する講義のほかに、ギリシア古典、新約聖書、ドイツの哲學古典などの、演習や講讀を受けもつてをられた。それは大へんなお仕事であつたらうといふことを、私も今その三分の一だけの仕事を受けもつてみて、やつと分りかけて來た。當時の生意氣な私たちには、無論、そのやうな察しもなく、先生の演習が少ししか進まぬのを不滿に思つたりしてゐた。しかし先生は、ギリシア、キリスト教、ドイツといふやうな大きな世界の學問の正統を、一身の重荷として背負つてをられたわけで、その努力は蒼天を荷なつてゐたアトラスを思はせるものがあるとも言へる。口の悪い菊池さんも、先生がお宅で、いつも大きな書物と取組んでをられるのだけは、感心してゐたことを思ひ出す。しかしこのやうな大仕事も、弱冠二十五歳の時の作で、今日まで日本人の書いたものでこれ以上のものが出てゐないと言はれる、あの「哲學史要」の序文にあるやうな、「フイッシエルの不朽の大著、九卷六千餘頁の近世哲學史」を忽ちに讀破する精力をもつてすれば、それほど困難ではなかつたかも知れない。しかし先生の健康狀態が、今はそれを大へんな負擔にしてゐたやうに思ふ。しかも先生のこのやうな努力に對して、一般にどれだけの理解と同情が得られたのか、すこぶる疑はしい。先生の學問も、既に見られたやうに、孤立したものであつたし、先生の氣質も孤獨なものであつたやうに思ふ。

また從つて、いはゆるボス的な性格は、先生にはまるでなかつたやうに思ふ。就職の世話といふやうなものも、あまりされなかつたらしい。私自身もさういふお世話にはならなかつた。しかし先輩は紹介していただいた。そして交際下手な私も、それらの先輩の好意にあづかることが少くなかつたことを、今になつて思ひ出す。また先生は、手紙をよく書かれた。（これは私にとても眞似られない）そして先生の氣質として、口で言へないことも、手紙ではいろいろ言はれるらしかつた。これもあるひは先生の損な一面であつたかも知れない。私も學校を出て、東京へ歸つて間もなく、私の暴慢な態度について、親切な御忠告をいただいたし、假名づかひから、文章のことまで、いろいろと御批評をいただいた。（私は大學に入つた年の夏休みに、出さんの仕事を手傳つて、ウィンデルバンドの「プラトン」を譯したが、これの校正刷を見ていただいた時にも、出さんの話だと、行李一杯の御手紙がたまつたといふことだつた。私が後に「テアイテトス」を譯した時にも、譯稿の一部について、やはり手紙を澤山にいただいた）

私は大學を出ると、すぐ東京へ來てしまつたので、はじめの

中、御上京の折に二、三度お目にかかつただけで、その後は大患にかかられ、御上京のこともなく、御手紙だけの交渉になつてしまつたが、停年で御退官の後、むかしの御希望通り、東京へ移つて來られたので、また時々お邪魔するやうになつた。先生はもう酒は飲まれず、嚴格な食養生をされてゐた。奥様が先になくなられ、雄二郎君御夫妻と一緒のお暮しだつた。立派な電蓄があつて、レコードと音樂研究書類のコレクションは、すばらしいものだつたやうに思ふ。先生は京大在學中にお目にかかつてゐた時よりも、ずつと血色もよく、御元氣さうだつた。藏書の大部分は、日本神學校に寄附されてしまつてゐたが、それでもギリシア古典が聖書と共に、先生の座右にあり、話もそれらに關することが多かつた。しかし時代は重苦しい戰爭期で生活條件は日一日と惡化して行く時だつた。しかし政治論や時事談は、あまり出なかつた。日常生活に不平の多い時であつたが、先生は生活を明るく見ようと努力してをられた。貧しい配給物についても、その利用法などを說明されることもあつた。私は戰爭について、多くの人とは違つた見通しをもつてゐたので、早期に疎開をおすすめしようとしたが、先生は笑つて應じられなかつた。戰爭の末期、爆彈がお宅の近くに落ちるやうになつてから、岩手縣の方へ行かれたやうであるが、私自身が戰災にあつて、しばらくは一切の消息が絶たれてしまひ、くわしいことは何も聞けなかつた。その二月か、三月頃、東京女子大の近くで、鳥打帽に大きなマントといふ姿の、散歩中の先生にお會ひしたのが、その時の最後だつたやうに思ふ。終戰後

群馬から浦和へ出て來て、また先生のお手紙を、遠い岩手からいただくやうになつた。私が京都へ來ることになつて、それのお知らせや御相談を申し上げたのも、岩手の先生に對してであつた。そのうちに、先生は玉川學園の方へ見えるといふことで、のびのびの御上京をずいぶんお待ちした上で、久しぶりにお目にかかることができた。御元氣のやうで、何よりうれしかつた。それからその秋には、私たちは京都へ來てしまひ、二十四年だかの六月に、上京する機會があつて、病臥中の先生にお目にかかつたが、それが最後であつた。ずいぶんお苦しい病氣のやうに承つてゐたが、戰爭中の先生がさうであつたやうに、やはり明るい見方をするやうにしてをられた。私にとつては、先生はいつまでも行儀のよい、克己的な先生であられた。私は先生の死に、かのギリシアの英雄ヘラクレスの生涯を思はずにはゐられない。

晩年の波多野先生

松村克己

先生の主著「宗教哲學」が岩波全書の一册として世に出たのは昭和十年の春であつた。尤もその內容の大部分は岩波講座「哲學」の中に昭和七年と八年との二回に亙つて發表され、九年には「哲學研究」に「愛」の一章が掲げられ、之に續く三章

を附して公刊されたのが「宗教哲學」である。當時私は大學院にあつて基督教の勉强を續けつゝ主としてアウグスティヌスの研究に興味を寄せてゐた頃であつたが、結婚して家を持つようになり、自分の家というものに坐し、先生からお祝に頂いた花瓶を前にして、机の上にひろげた最初の書物が丁度先生から屆けて頂いたばかりの「宗教哲學」であつたことを思い出す。それはつい先頃のことであつたやうな氣がしてならない。先生に接したのはそれから數年前になるわけであるが、個人的にお近付きを得るやうになつたのはその二三年來のことである。先生は昭和十二年の夏にはもう停年で退官されたのであるから、私は先生の學問的生涯に於いては云はゞ末つ子弟子のやうな位置にあつて、先生の晩年に比較的近く立つことを許された一人である。至らぬ私が先生の愛顧を受けた恐らく最大の理由は時のめぐり合せであつたらう。茲には先生の晩年約二十三年間に亙る期間の學問形成の跡と、その生活の姿とを追想して見たいと思う。

先生はその魁偉にして堂々たる風貌と共に近づきがたい嚴しさを持つて居られた。容易に人を近づけぬかのやうにさへ見えた。併し許した者には何人に拘らず—弟子たちだけではない、出入の者に至るまで—先生の愛情は深くまた濃やかであつた。中にはこの眞實に堪え切れないで身を退いた者もあつたかと思う。先生の嚴しさは學問と生活とを貫いて一つなる先生の生のメトーデであつた。先生は何事にもはつきりしたプリンシプルを以て對され、そこに先生の性格の强さが顯はれた。「波多野

流」とも云うべきものが何時でも見られ、それは死の瞬間までも崩されなかつた。その生活は几帳面で、律儀であり、時間的に極めて正確であつた。單純、淸淡、無邪氣という語でその生活の雰圍氣を表はすことが出來さうである。併し多少の註釋を加えるならば、その單純は豐かなる內容を凝縮させた枯淡の趣きをたゝえ、その無邪氣は老熟と柔軟さとを兼ね備えた熟誠に貫かれてゐた。苟しくも事をせず凡てに先生一流の見識と趣味とが高い氣品としてたゞようてゐた。私の知つてからの先生のお宅ではいつも猫と犬とを見かけたが、それらをどんなに可愛がつても先生は節度を踏み外すことがなかつた。それらは實によく訓練されまたついてゐるが、犬をじやらすのは必ず足か杖であつて決して手を觸れる事はなかつたと聞く。また、うちでは新米の女中は猫に訓練されるよ、と戯談の如く云はれたお言葉も耳に殘つてゐる。その意味はかうである。食物は必ず台の上に置く、台所でもどこでも歩く板間においてはいけない、と教へても田舍出の女中は習慣の故に之が中〻守れない。一方古くから飼はれてゐる猫にはちやんと訓練が行はれてゐて、台の上に乘つてゐる食物には絶對に口をつけぬが、下の板間や盤の上に降されたものは與へられたものとして食べる。女中は猫にしてやられてその度びに無意識の習慣から拔け出すことを學ばせられるというわけである。先生は極めてユーモアに富んだ一面のあつたことは餘り知られてゐない。之は晩年の蟄居に近い生活や病床に於いて特に横溢した一面であるが、教授として學生たちに接せられた時にも折に觸れて見られたものであり、

少しく注意して讀む者はあの無駄のない力強い文章の中に厳、現はれては全體の空氣を亂すように見えてしかも印象に殘る餘韻を出して行く歯切れのよい江戸つ子調の諷刺の言を想ひ起すことであらう。可成り激しい言葉を用い乍ら嫌味を出さないのは先生のユーモアの故である。

先生の外貌を包む近づき難い厳しさを「方法」として理解し得ない者には遂に先生のヴェーゼンに觸れることが出來なかつたやうである。或者は先生のこの態度をペダンティックと感じ傲頑として受取つた。先生は確かに意志の強い方ではあつたが、この性格の強さは前者からのみ説明する事は出來ないであらう。性格は全體的な調和に於いて示される生の恆常的メトーデであるとすれば、この強さは強靱な頭腦と敏感にして柔軟な心臓にもその根抵を持つてゐる筈である。無性格な人、性格の弱い人は先生のこの外貌に壓倒されて、近づくことをしないがこの「方法」の厳しさの背後には豊かな愛と自由と眞實とが、靜かに溢れ流れて盡きぬ泉のやうに深くたゝへられてゐた。「先生に於いては性格の強さと情の温かさというものが渾然と一つになつてゐた」と西谷(啓治)さんも云はれてゐるが、この變らぬヴェーゼンの顯はれ方は時と共に少しづつ變つて行つたやうである。そして先生は何時でも自らのこのメトーデを決して人に押しつけるような事はなかつた。

晩年になると共に先生は優しくなられたと多くの人が云う。誰でも人は一般に老年になると優しくなる。年とつて氣むづかしくなるというのは多く病的な場合であらう。併し先生の場合にはこのやうな自然に基く理由の外に、意識的意志的な理由も存在したやうに思はれる。それだけにまた先生の生涯を特色づけたあの厳しさの前に頭の下る思いを深くする。岩手縣の疎開先きから東京の玉川學園に迎へられて上京する決心をされた時、園長小原國芳氏に宛てられた書翰の一節に「私は今まで自分の研究に没頭しすぎた、今度は弟子を作ることに力を注がう」という意味のお言葉がある。「自分の研究に没頭しすぎた」というこの語には悔いの響きは感ぜられず、寧ろ滿足と喜びの調べさへ聞きとれる。それほどに先生は己が使命と信ずる道に精進し盡されたのであつた。この事は先生が一切の講演を斷られ、雜文を一つも書かれなかつたことを想起すれば足りる。先生の全集五卷は文字通り先生の手に成つた文章の凡てを含んでゐるが、專門の學問的勞作以外に筆をとられたのは私の知る限りではたゞ三つの例外があるだけである。一は「思想」のケーベル先生追悼號に、二は三木(清)さんの歿後、遺稿をまとめた「構想力の論理」(第二)の跋文に、三は戰歿した宮本(馨)君の遺稿「信仰と文學」の序文に、乞はるゝまゝに物された追悼の短い文章である。この例外がまた甚だよく先生の面目を示してゐると思う。「波多野流」は決して先生の主義ではなかつた。先生は主義にとらはれる人ではなく、何よりも自由を尊ばれた。先生の愛せられたものにして自由に勝るものなく、自由は先生の生命であつた。それ故にこそ先生は厳しい方法を死の瞬間まで崩されなかつたのではあるまいか。先生の逝くなられたのは昭和二十五年の一月十七日の午前八時である。午前三時す

ぎ腸出血が始まつて止まらず次第に生命の源の枯れ行くと共に息を引とられたのであるがその中でなほ平常の習慣を保たれ、午前六時のラヂオの時報に依つて時計を合されたという。

最初に記したやうに先生の主著の出たのは停年退官の二年前である。退官の前後は胃潰瘍で大量の吐血をされ、手術によつて患部を切除し九死に一生を得られたお蔭で、健康の回復と共に之に續く三部作「宗教哲學序論」及び「時と永遠」を完成されたのであるが、前者は「宗教哲學」を書き終へられた直後、既にその構想は成つてゐたものの如く、昭和十年の新學年から今迄長く繰返されてゐた大學に於ける普通講義「宗教學」の内容を全く書き改めて講ぜられた。京大に於いて二ヶ年間、退官後健康を回復されてからは同志社大學及び關西學院大學に於いても爲されたが、この講義が「宗教哲學序論」として昭和十五年に出版されたのである。「時と永遠」は十八年に世に出たものであるが扉には「亡き妻の記念に」という文字が愼ましやかに記されてある。奥様の逝くなられたのは十四年であつたかと記憶するが、爾來先生は世を去らるゝ五日前まで十一年の間、毎年迎へる記念の日一月十三日を深い思いを以て待ちまた過された。「時と永遠」という題目は「宗教哲學」末尾の一章であるが、自ら生死の境を出入する大患を經、愛する者と別れて先生の胸中に往來したもの、また先生の思索がどの方向に向つたかは想像に難くない。このやうにして濃醸してゐたものが偶〻折を得た。先生は十六年の三月京都を引拂はれて東京に移り、令息夫妻と生活を共にされることとなつたが、上京された翌年乞はるゝまゝに今の東京神學大學で十回の特別講義を行はれた。それが機縁となつて原稿に手を加へ、先生としては異例の短日月の間に成つたのが「時と永遠」である。それは一年足らず九ヶ月位の間であつたかと想像される。「宗教哲學」が約十年に亙る苦心慘憺の結果生み出されたのと比較すればその對照は大きい。先生晩年の作でありながら若さと情熱に溢れてゐるのはその爲めである。文章のスタイルとしては先生自身この書を最も深い滿足を以て語られたほどである。それは自然に熟して落ちたものと云う天眞の趣きがある。時宛かも戰況は次第に下り坂となり生活の不便は日に加はり、先生も東京に留る事が他の人々の足手まといとなる事を案じて二十年三月には疎開を決行される事となつた。千歳での不自由な生活は二年余に亙るがそこでの一二の事柄を語らう。

一は私事に亙つて恐縮であるが、叱られて深く教へられまた勵まされた經驗である。併し事柄は先生の學問形成の祕められた一端を明らかにする。二十一年の夏のこと。先生をお訪ねして四方山の話の序でに、私はある書店から頼まれた書物のために、原稿を半分書いたまゝ中斷されて困つてゐるということを漏した。當時戰後の出版洪水の中で書物は出さへすれば何でも賣れたので、私もおだてられて柄にもなく「學問の道」というやうなものを書きかけてゐたのであるが、いはゞこのやうな餘技に制かれる時間が惜しく、爲すべき事は次第に果されずに重壓を感じてゐたのである。先生の樣子が急に變つた。それでも

鈍い私はまだ初めの間は氣が付かないでゐた。「本屋の儲はれ仕事なんざあ斷然斷り給へ、君がそんなものを書いて出したら僕は今迄の君を見直すよ、輕蔑する」と云はれてハッと氣がついた途端に、何とも恐縮する外はなかつた。云はれる迄もなく事理は明瞭である。道草なんか食つてゐて學問は出來るものではない。今は特にそんな時ではない、と云はれるのである。この事は既に大學院入學の當時、先生のお宅に伺つた時にも注意されてゐた事であつた。學問の道は生易しいことでは完うされない。不人情は困るが强いて非人情にならなくては出來ない。と云はれたことを想起する。先生は之を貫かれたのであつた。不人情は先生のヴェーゼンに合はない。人一倍暖い心と柔軟な精神とを持ちつゝ情熱を祕めて敢て非人情の道を歩み續けられたのは一筋の學問のためであつた。先生は實によく氣のつく行き屆いた方であつた。生前この面は凡て奥樣に委ねられてゐた。先生のこの面が人に知られるようになつたのは奥樣の歿後である。先生の非人情は人情と常識との底を深く潜つて之を超えてゐた。烈しい語氣で一氣に叱られた後は聲を落してしんみりと述懷をされた。先生から過去のことを語られたことはさう澤山はない。これはその例外の一つである。羞しがり屋であつた先生は滅多に自分のことを語られなかつた。この時も自分のことを申しては烏滸がましく聞き苦しいだらうがと言譯をしながら「宗教哲學」の成る迄の苦心を漏された。先生が早稻田大學の騷動で、直接事件に關係はなかつたのであらうが、その信ずる處に從つて辭され、京大に宗教學を擔任されるようになつたのは大正六年のことであつた。先生の最初の著書は周知の如く「西洋哲學史要」であり、明治四十年から四十一年に亙つては東大に講師として「基督教の起源」を講ぜられたことはあるが、それまで先生の專攻の領域はずつと西洋哲學史であつた。大學在學中受洗して基督教徒となられた先生に宗教を學問の對象として取上げる興味がなかつたとは云へまいが、哲學史思想史の廣い視野の下に宗教哲學を新たに樹立せんとする學的野心と責務とを感ぜられるやうになつたのは恐らく京大に移つて暫くの後であつたに違いない。「宗教哲學の本質及其根本問題」は大正九年の京大夏期講演に於いて行はれた講義であるが、その後「宗教哲學」の出るまでの十數年に亙る期間は何の業績も現はれなかつた。尤も大正十年には「西洋宗教思想史」(第一、ギリシヤの卷)が出てゐる。之は先生の學的興味が哲學と宗教の兩面に注がれ、茲から先生獨自の學問領域が開かれるかと期待されたものであるが、これは遂に中絶のまゝとなつた。吾々にとつては遺憾この上もない事ではあるが、この犧牲の上に宗教哲學三部作の建設は行はれ前人未踏の學問的領域の開拓の業が進められることとなつたわけである。

先生の宗教哲學の性格と方法、その方向は既に大正九年の講演にはつきりと現はれてゐる。迂余曲折はあるが根本に於いて先生の立場は少しも變つてはゐない。茲で見出された問題を掘り下げ彫琢する爲に、先生はやがてのつぴきならぬ窮地に陷れる自己を見出さねばならなかつた。「宗教哲學」の序にも記されてゐるように、この書物は筆執り始めて後一應の完結を見る

までに七年の歳月を要した。それだけでもその難航ぶりは察せられる。「新しき問題は一より他へと殆んど強制力を以て著者を引摺りながら展開した」と記されてゐるが、この事態の展開に身を委せつゝ先生の悪戰苦闘は續けられ、この間に先生の頑丈な肉體も可成り蝕ばまれたやうである。睡られぬ夜の續いたこともあり、睡眠劑の使用に危惧を感ぜられた經驗もこの間の事であるらしい。千駄の假寓で先生はこの間の事を回想しつゝ言葉少なに語られた。

途方に暮れて放棄しようと思つたことも何度あつたか知れない。忠告に來てくれた友人もあつた。波多野、貴樣は京都へ出てからどうしたんだ、鳴かず飛ばずそれで埋れる積りか、だらしがないぞ、しつかりしろ、云はれる迄もなく凡ゆるものを犧牲にして全力を注いではゐるのだがどうにもならない場合がある。併し君、學問というものは忍耐が要るんでね、決して手放したり休んだりしちや駄目なんだ、取組んでゐれば何時か開かれる。焦らずに、併し傍目をふらずにやるんだね、道草なんか出來やしないよ……と。

先生のやうな才を以てしてなほ右のやうな苦悶の述懐をきゝ得た事は私にとつて意外でありまた深い慰めでもあつた。それはまた天啓とも云うべき瞬間であつた。先生は才に負けたら學問は出來ないとも云はれた。確かに先生は生涯その稀なる才を以てして之と眞劍に戰つて來られた事を知る。「自分の研究に沒頭しすぎた」盛期にあつては、先生は家人に對してもコワかつたさうである。「時と永遠」を書き上げた時は先生の生涯に於ける最も幸福な二つの時の一つであつたと漏されてゐる。先生はあの非凡の能力を以てして個人的限界をよく知つて居られた。先生の切り開かれた宗教哲學の領域にはなほ今後の建設發展に俟つべき課題が少くない。それらに對して先生は、自分の爲し得ることは既に終つたので、後は君たちの分だと云はれた。晩年の先生には「我走るべき道程を果し」と云つたパウロの心境にも似た思いがあつたらう。先生の人間性が堰を切つたやうに豐かにその周圍に注がれたのはその晩年の數年間だとも考へられる。同時にその晩年は外的生活の情況に於ては多くの不便と荒涼たるものを他に感ぜしめたとしても、先生自身の心に於いては最も幸福な時期であつたに違いないと思はれる。

既に余白は盡きたが、千駄時代の先生についてなほ一つの事がある。折に觸れて先生に近づくことを得た土地の二三の青年たちの間に先生の存在が大きな感化を與へたことである。彼等少數のものを媒介として地味な併し强力な精神的宗教的な動きが始まつてゐる。年老いて先生のうちには却つて若い精神が動いてゐたやうである。玉川學園に行かれた先生の心中に動いてゐたものが何かわかるような氣がするのである。

（先生の命日に）